

ディネの国から —ナバホの子どもたちとわたし—

エイムズ唯子



最終回「旋律とともに歩まん」

今年の八重桜が咲くころ、群馬からアリゾナへ引っ越して5年が経ちます。ナバホ族の公立高校で教える仕事を楽しいと感じ、州都フェニックスのお茶室「夢想庵」でのボランティア活動も軌道に乗りはじめました。新世界での生活に余裕を生みだせたことは、わたしの半世紀の人生におけるちいさな自信となりました。

ドヴォルザークの交響曲第9番「新世界より」（初演1893年）は、わたしにとって、特別な曲です。チェロを習っていた学生時代、アマチュアのオケ仲間とボストンへ演奏旅行をさせてもらったときに、下手でも勢いで盛り上がって、アメリカ人にウケるはずと、はしたない動機で「新世界より」をプログラムに選び、温かい拍手を頂いた思い出があるのです。

第1楽章は、あとで大波のようにやってくる高まりを約束しつつ、静かにはじまります。低弦が伝える不穏な気配を決定づけるように、ホルンが角笛を模し、その旋律をフルートとオーボエが引き継ぐと、鶯がピーヒョロロと啼きながら巡回するのを眺めているような、伸びやかな風景がひろがります。そこへ、ティンパニのバチがダダダン！と振り下ろされ、緊迫が走ったかと思うと、勇壮で切れのよいメロディーがあらわれて、ぐんぐんと曲を前へと運んでいきます。

ナバホ族の「ロング・ウォーク」の史実を知ってから、このシンフォニーを「カッコイイ♡」と思って聴くことが、できなくなりました。不吉な予感、幼子や老人をかばい、18日間、裸足で歩かされることになった人たちのものです。進軍ラッパ。大砲のとどろき。馬のいななき。兵士の気配。風を切る鞭の音。隣州のニューメキシコの不毛の地へ、500キロを徒歩で強制移住させられたナバホ族の屈辱と艱難の歴史は、祖父母から孫へと伝えられています。お目あての金鉢がみつ

からず、居留地の維持費がかさむことに業を煮やした合衆国は、移住政策を撤回。一族が5年ぶりに先祖伝来の地に帰還することができたのは、日本が明治維新を迎えた1868年のことです。

ディネの国に暮らすうちに、いっそう好きになったクラシックの名曲もあります。イギリスの作曲家、エルガーの「威風堂々」は、ゲナード高校では、卒業生の入場行進曲です。新型コロナウイルスの感染がナバホ居住地にもひろがり、学年末の5月まで学校が閉鎖されたため、卒業式も行われぬ見通しですが、去年は、自閉症スペクトラムのライアンにつきそって、この旋律を舞台袖のスピーカーのそばで、大音量で聞きました。ライアンは、予行練習の時、興奮してざわめく同級生に圧倒され、黙って列を離れて、搜索さわぎになった生徒です。休み時間にトイレでぐずぐずしていたために、授業に遅刻しては、教室のドアをノックする音が小さくてだれにも気づいてもらえず、廊下に立ちつくしていたライアン。卒業生用のキャップとガウンで盛装したライアンはあの日、家族席からの歓声に応えながらアリーナを横切り、まっすぐに自分の席へ歩いていきました。

ライアンは、フェニックスで同じ障がいを持ったひとびとのグループホームに入ることを希望していますが、発達障がい者としては能力が高すぎるとして、施設入所に必要な社会保障の申請を2度却下されています。どうか、ライアンの望みが叶いますように。あなたの歩みの先に、希望と喜びがありますように。



The End